

海外の話題

日常生活と人々の心の中にある“インフレ期待” in NY

農林中央金庫 ニューヨーク支店長 藤井 英孝

2022年がスタートしました。今年の金融市場を見ていく上で最もホットなトピックは、米国のインフレ・リスクと想定を超えるFRBの利上げ懸念だと思います。米国労働省が11月に発表した10月のCPI（消費者物価指数）は、31年ぶりに前年対比+6.0%超えを記録し、11月も同様に高い伸び率を示しています。変動の大きいエネルギーや食品を除いたコアCPIと呼ばれる指標で見ても、5.0%近い伸びを示しており、経済活動の再開に伴う需要回復に供給サイドが追いつかず、材料不足や人手不足が全米各地で生じていると言われています。

さて、私事になりますが、ニューヨークへ着任して約8ヶ月が経過しました。その間、驚異的なスピードで進んだワクチン接種や本格的な経済再開に伴ってマンハッタンに活気が戻るなど、危機に臨んだ力強い国家の姿と街に生きる人々の生命力をひしひしと感じています。いまだにニューヨーク州ではコロナの新規感染患者は日々数千人規模で存在し（12月10日現在）、オミクロン変異株の患者が出はじめるなど懸念がまったくないわけではありませんが、いわゆる“withコロナ”の生活をうまく実践できているのが現在の米国の国民性であり、強さなのではないでしょうか。

本題に戻ってインフレについてです。皆さんは、“インフレ期待”という言葉をお聞きになったことがありますか？教科書的に言えば、「将来に対して人々が感じるインフレの予想（期待）」と書かれているのですが、バブル以降の日本経済しか知らない私にとって、インフレ期待という言葉は単なる机上の理論値という感覚でした。そうした私が今回ニューヨークで実際の生活をおくる中で最も驚いた経験の一つが、日常生活の中でインフレ（物価の値上がり）をリアルに肌で感じることもあるということでした。

いくつかご紹介すると、コロナの影響の反動が大きかったと思いますが、まず家賃の上昇が顕著でした。コロナの影響でマンハッタンから人々が郊外へ避難し、一時的に家賃の値下がりが見られましたが、現在はコロナ前の水準以上にまで上昇しているとも言われ、物件探しに苦労する状況になってきているようです。郊外の物件にいたっては、コロナ禍でさえ下落することなく、むしろ大きく上昇した後も値上がりが続いている状況と言われています。もともと、不動産は景気の変動を受けやすく、今回の家賃上昇もどちらかといえば、インフレというよりはコロナに伴う一時的な影響という整理ができるかもしれません。

しかし、このほかにもローカル職員の給料を考える際に、インフレ上昇を賃上げのベースとして考える、日本では伝説となっている所謂“ベア＝ベース・アップ”が当然のように給与交渉の前提となっています。また、街へ出ればレストランでの食事やチップ（以前は15%と言われていたチップですが最近では20%が当たり前とも、、、）なども上がり続けているようで、米国では身の回りの多くのモノやサービスに継続的な値上がりが自動的に組み込まれているように感じます。言い換えると、米国で生活している人の心には、きっと来年以降も多くのモノやサービス、もしかすると株式までも基本的には値上がるだろうという考えがDNAのように根付いているように思います。したがって、何かものを買う場合には値上がる前、すなわち今のうちに買っておこうという消費意欲につながっていく効果があるのではないかと感じます。まさに、人々の心に根付いているこうした気持ちをインフレ期待、インフレ心理という言葉で表しているものであり、私にとって初めてのインフレ期待を実感しています。

翻って日本では、電車・バス料金や電気・ガス料金などでたまに値上げが実施される場合には必ず大きなニュースとなって報道されています。このため、値上げ＝悪というイメージが持たれる中で、値上げをしたい企業にとっては大きなプレッシャーがかかっているように見えます。こうした環境が何十年も続くと、当然、今年だけでなく来年も多くのモノやサービスの価格は上がらないし、この先の将来に対してもモノやサービスの値段は上がらないものなのだと多くの人が心の中で考えていくようになってしまいます。実際、私自身が無意識にそうした考えを持っていました。所得が上がらない中で物価だけが上がることは確かに消費者にとってマイナス要因になりますが、緩やかなインフレとそれを支える所得の上昇が健全な経済の成長を生み出すという基本的な仕組みをどこかに忘れてきてしまったように感じます。

日銀が目指すようなインフレ目標を達成することが先なのか、政府が掲げる賃上げ（所得向上）のどちらが先なのかは分かりませんが、日本が再び経済成長を取り戻すということは、私達一人ひとりの日常の生活と心の中に小さなインフレ期待を取り戻していくことなのかもしれません。

と考える一方で、何年経っても1,000円で食べられる美味しいランチと無料で受けられる極上のサービス、、、矛盾を承知で、改めて日本ほど住み心地の良い国はないと実感しています。